

工科総掛かりで昼夜兼行の製作を行い、生徒も先輩たちとともに手伝って製作の実施勉強をした。

⑬ 大村西崖『密教発達志』の帝国学士院賞受賞

本校東洋美術史担当教授にして生徒監の大村西崖は本務の傍ら東洋古美術研究書の執筆および出版事業につとめ、大正四年には『支那美術史彫塑篇』（仏書刊行会図像部発行）を著し、次いで同七年には『密教発達志』（同前）を著した。後者は長年に亙る密教研究によりその蘊蓄を傾けて完成した大著で、出版を機に西崖は本校内外の希望者を集めて翌八年一月八日以降一年間に亙り、第一講義室で「密教美術史」の特別講演を行なった。次いで同九年五月三十日、西崖は本書により帝国学士院賞を受賞した。



帝国学士院賞を受賞した大村西崖

『東京美術学校校友会月報』第十九巻第三号にはこのことが大きく採り上げられ、まず大礼服姿の西崖の写真が口絵に掲げられ、「授賞審査要旨」が掲載された。次いで西崖の漢文「拙著蒙學士院選奨諸友投簡寄頌或張宴賀之乃賦七言廿韻以敘懷兼言謝」の一篇が載せられ、さらに「芸苑叢報」の欄には授賞式と祝賀会の模様が次のように記された。

○大村教授の學士院賞受賞 既

記の如く帝國士學院本年度第一部の學士院賞は本校の大村教授に擬せられたるが、愈々五月三日の帝國學士院部會に於て卷頭記載の要旨により授賞と決定し（五月十日官報）五月三十日午前十時より本校大講堂に於て朝野の高官名士會員參列の上、盛大なる授賞式を舉行され、席上文學博士村上專精氏は授賞の理由を説明され、大村教授は賞牌賞記及金壹千圓を滿堂の拍手裡に受領されり、教授は本校第一回の卒業生にして、博士中の博士と稱せらるゝ極少數の學者が受く可き名譽を荷はれたるは母校同窓一同の最も欣喜に堪へざる所なり。

○同上祝賀會 授賞式の夕午後五時より、豫ねて正木〔直彦〕校長、白井〔雨山〕、白濱〔徵〕、結城〔素明〕諸教授鈴川〔信一〕講師溝口禎次郎氏其他朝野の名士學者の發起に依る祝賀會は上野精養軒に於て舉行されたり、定刻過ぎ、來會者百六十名は階下大食堂に集合し開宴し、デザート、コースに入るや、發起人側を代表して正木校長祝辭を述べられ、次で大村教授の答辭あり、次ぎに特に上京參列せられたる權田雷斧師は宗教家の立場より教授を激賞し、次に又玄畫社を代表して奥宮正治氏祝辭を述べられ續いて赤羽雪邦氏等の祝辭あり、未曾有の盛會を極めたり。

⑭ 校友会文芸部発足

明治四十年代から大正はじめにかけて活発な活動を続けた校友会文学部（第二卷³⁹³、³⁹⁶頁参照）は次第に衰えたが、大正九年三月に再び文芸愛好家有志が集まり、文芸部として体制を立て直した。そこで定められた規則は次のようなものであった。

文藝部新規定詳細

二月十四日の文藝部總會席上で定めた新規定を、前號で一寸其の概要だけ報告致して置きましたが、更めて詳細を當日缺席された部員並に校友諸兄に報告致します。

一、文學部を文藝部と改稱す。

一、文藝部に左の七部を設く。

漢詩部、書道部、短歌部、創作部、講演部、書籍購讀部、

美術研究部、

右の内書籍購讀部は文藝部所有の月刊雜誌及著作書類を次の規定に依つて、會員に貸出を許すこと。

▲規定。同部書架に備付の貸出帳に、借出本の名稱、借出の日及學年姓名を記入して、一應委員に此の旨を届くること。直接委員に申込まれて、委員の手より受け取らるゝも可。

月刊雜誌は三日以内に委員に迄返却の事。

著作書類は月曜日に持歸へりて、次週月曜日に委員に迄返却の事。

▲月刊雜誌の種類

▲白樺 ▲人間 ▲中央公論 三田文學 早稻田文學 新潮 六合雜誌 歴史と地理 自然 考古學雜誌 地上 藝苑 現代 詩歌 中央美術 美術寫眞畫報 文字（字之）の十六種とす。▲印は二册購入

逐次種類を増加す。

一、會費は參拾錢として、毎月五日迄に委員に於て之を集むる事。

一、例會を毎月最終の土曜日に開く。

（會場時間等は生徒控所に適時揭示す）

一、五月一日頃理學士田邊尙雄氏に講演を乞ふこと。題「音樂の話」蓄音器使用

一、委員に左の十氏を撰ふ。

日本畫科 遠藤 教三 岩田 西介

西洋畫科 岩田 藤七 和田 茂生

圖案科第一部 森 正

鑄造科 豐田 勝秋

漆工科 田中 貞二

圖案科第二部 土井 軍次

師範科 一井爲次郎

金工科 小澤小一郎 の十氏

森田（亀之助）、田邊（孝次）先生に監理の任に當つて頂く事は従前通り。

右の六ヶ條を當日出席會員の多數に問ふて採決しました。

此の外にして、會に新しい希望案をもたるゝ方は、毎月の會合席上に夫れを提案して頂きたい。又緊急な事柄は先生及委員に何時なりとも申出て下さい。そして部員一同お互に温情をもつて、會の向上を計つてゆきたいと思つて居ります（和田（茂生）記）。

（『東京美術学校校友會月報』第十八卷第九号）

同年五月一日、森田亀之助、田邊孝次の居る美術史研究室で文芸部茶話會が開かれ、上記委員に加えて日本画科委員に小林和郎と高

田美一が、西洋画科委員に吉年素彦と長島豊が選ばれ、また、委員の中から特別委員として書籍係に岩田、田中、吉年が、会計に豊田が、記録係に遠藤、和田が、短歌部委員に同じく和田が選ばれた。

短歌部は和田茂生の熱意により、活動がなかなか盛んで、月報には彼らの作が多く掲載されている。佐伯祐三なども「死の国」「行く年」「冬のある曇れる日」の短歌を寄稿している。部員には外に宮沢均、住吉良康、遠藤教三、富永親徳、山田新一、衣川草太郎、森正、吉田絢吉、豊田勝秋その他が居た。また、月報には短歌欄の姉妹篇として自由詩の欄も設けられ、吉田絢吉、須藤雅路その他が寄稿している。

漢詩部は生徒に敬遠されたのか、月報の漢詩欄に登場するのは大村西崖、芦沢閑(刀川)、白井雨山、小場恒吉等、殆ど職員のみであった。なお、文芸部は発足後間もなくレコードコンサートを行なったが、それを機に蓄音器部が設けられ、音楽愛好家の人気を呼んだ。

⑮ 四十年社

明治四十年本校西洋画科入学者のなかにはユニークな人物が多かった。彼らは卒業後はさまざまな研鑽の途を歩んだが、大正九年三月二十三日に至り、親睦のため新たに四十年社を結成し、毎年作品展を開くこととなった。『東京美術学校校友会月報』第十九巻第一号の記事によれば、社員は次の十四名であった。

御厨純一、神津港人、北島浅一、佐藤哲三郎、工藤三郎、清原重一、三国久、斎藤素巖、片多徳郎、萬鉄五郎、金沢重治、野元義

雄、熊岡美彦、浅井松彦

第一回展の様子は『中外商業新報』(大正九年三月二十八日)が次のように伝えている。

四十年社展覽會 美術に限らず學校卒業生で或る一年に限り多數の秀才を産出する事のあるのは屢々實見する所であるが明治四十年入學の美術學校^(西評)西畫科生も此の感じがある。先づ院展の寵兒片多徳郎氏がある。美術院の賣つ兒齋藤素巖氏がある。二科會の鬼才萬鉄五郎氏がある。此等の人々が一つの級から出たと云ふのは興味のある事である。▲今度此の人達が集まつて友誼上の組合を作つて四十年社と名附け廿五日から十日間東京美術學校の俱樂部で作品展覽會を開いた。▲北島浅一君の八點中では「對岸の雪」の水の微光が非常によく描けてゐる。「瓜」はバックと人物との關係が面白い。「湯ヶ島」も軽い筆である。▲御厨純一君の八點では「暖日」が努力した作である。「秋の日」「山の公孫樹」「滿潮」等にも氏の特長が現れてゐる。▲三国久君の三點中「砂糖くり」は裝飾畫として上氣なるものだ。▲片多徳郎君の五點中「冬の谷間」「中禪寺湖畔」「靜物一」が頗る光つて居る。▲金澤重一君の五點では「老人」の表情頗る面白く「靜物」の壺の色は微妙な感じを出して居る。「輕井澤の晩秋」も佳作だ。▲齋藤素巖君のデッサン四點は流石に彫刻家らしい確實性に富んだものである。▲工藤三郎君の四點中では「曇り日」「漁村」が氏一流のメリコリーな調子を出して居る。▲佐藤哲三郎君の二點は「女の習作」に芳烈な肉の囁きを聞くことが出來た。▲萬鉄五郎君の六點